

新村 巖：「モズク」と「モヅク」について

1991年秋の日本水産学会シンポジウム「食用藻類の栽培」に参加して、総合討論の場で「モズク」と「モヅク」について、いずれかに統一してもらいたい旨の問題提起をしたことがある(三浦ら1992)。その時、説明した資料は表1の通りである。表1に挙げた文献で、「モヅク」は戦前(1945年以前)から使用されていたのに対し、「モズク」は戦後に発行されたものに見られる。「ヅ」と「ズ」の解釈について調べてみた。

『現代仮名遣い』(昭和61年内閣告示第1号)から抜粋すると：

- ①この仮名遣いは科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。(前書き3)
- ②原則に基づくきまりを第1(③)に示し、表記の慣習による特例を第2(④)に示した。(本文凡例1)
- ③語を書き表すのに、現代語の音韻に従って、次の仮名を用いる。ただし、傍線を施した仮名は、第2に示す場合にだけ用いるものである。
1 直音 あ い う え お (中略) ぎ じ ず ぜ
ぞ (中略) だ ぢ づ で ど (中略) わ を
(以下略) (本文第1)

④特定の語については、表記の慣習を尊重して次のように書く。(中略)

5 次のような語は、「ぢ」「づ」を用いて書く。

- (1) 同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」
例 ちぢみ(縮) つづみ(鼓) つづく(続) (他略)
- (2) 二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」

例 はなぢ(鼻血) みかづき(三日月) たづな(手綱)
にいづま(新妻) てづくり(手作) こづく(小突) (他略)
(後略) (本文第2)

以上のことから、語源からは「藻付く」→「モヅク」で、戦前の先達は藻類の文献はもとより国語辞典「廣辞林」にも「モヅク」と表記してきた。戦後になって国語の改革が行われ、上記「現代仮名遣い」が普及するにあたって、第1の「音韻に従って用いる」ことから、「モズク」が一般化され、さらに「前書き—3」の条文もあって辞典類にも「モズク」を表記するようになったのではないだろうか。しかし、戦後の図鑑類にも「モヅク」の表記があり、「ヅ」と「ズ」の混同は好ましくなく、統一すべきであろう。

このシンポジウムの討論で、当真 武氏からオキナワモズクの生産普及した現段階で「ズ」を「ヅ」に変更することに問題がある旨の意見があった。私は商品名は自由であって、学術上の標準和名の表記を統一することを提案するものである。

「イワズタ」も語源的には「岩薦」→「イワヅタ」で同様に解釈される。

これらは、いずれが正しいと言うわけではなく、藻類学会の中に検討会をもうけて統一するよう提案したい(ちなみに、私は戦後の文献に則って「イワズタ」「モズク」の表記を用いてきたが、語源の見地から今後は「イワヅタ」「モヅク」が望ましいと考えている)。

引用文献

三浦昭雄・右田清治・喜田和四郎・有賀祐勝・他 1992. 質疑応答と総合討論. 三浦昭雄(編) 水産学シリーズ88. 食用藻類の栽培. pp. 144-150. 恒星社厚生閣. 東京.

(鹿児島市紫原 2-26-9)

表1. 標準和名の記載例

モヅク	モズク
1. 遠藤吉三郎(1911): 海産植物学	1. 広瀬弘幸(1959): 藻類学総説
2. 山田幸男(1933): 有用有害鑑賞水産動植物図鑑	2. 瀬川宗吉(1960): 原色日本海藻図鑑
3. 岡田喜一(1934): 海藻図譜	3. 殖田三郎・岩本康三・三浦昭雄(1963): 水産植物学
4. 三省堂(1934): 廣辞林	4. 新崎盛敏(1964): 原色海藻検索図鑑
5. 岡村金太郎(1936): 日本海藻誌	5. 新村 出(1972): 広辞苑
6. 殖田三郎(1950): 水産植物学	6. 平凡社(1972): 世界大百科事典
7. 千原光雄(1975): 学研中高生図鑑「海藻」	7. 右田清治・四井敏雄(1972): モズクの養殖に関する研究
8. 藪 熙・山本弘敏・他(1983): 図鑑「北日本の魚と海藻」	8. 新村 巖(1977): オキナワモズクの養殖に関する研究
9. 徳田 廣・大野正夫・小川久朗(1987): 海藻資源養殖学	9. 吉田忠生・中嶋 泰・中田由和(1990): 日本産海藻目録